

川があるところに湖北のくらしがある

川のほとりは、人びとのくらしを豊かにし、うるおいをもたせてくれるところ。川は、かけがいのない命の水を運んでくれる。川から引いた水は飲み水となり、田や畑を潤す。おばあさんが川へ洗濯に行くと、桃太郎の桃がドンブラコ、ドンブラコと流れてくるというお話は、川が生命の源を運んでくれるという象徴的な昔話だ。川は聖なる流れ、桃太郎は幼な神の変身である。

湖北には、周囲の霊峰から流れ出る幾筋もの川がある。姉川、草野川、高時川、杉野川、天野川など、どの川のほとりにも、美しい水を祀り、命の糧とし、ときには水と戦ってきたお話がある。そんな人と川の話に接したら、「川をたいせつに」という空文句など必要なくなるだろう。

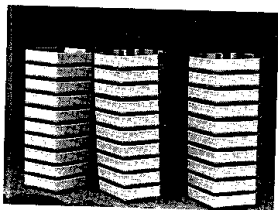
美しい水で白い絹糸をつくる

草野川のほとり浅井田野瀬



草野川は、県下第二の高峰金黃岳に源を発しています。浅井町の北にある上草野地区は、草野川の流れに沿って開けた水の美しいところ。そのなかほどにある野瀬の集落に、草野川の水を利用して製糸業を営んでいる家があります。押谷末太郎さんのお家です。ここでつくられる絹糸は、琴や三味線の原糸と絹織物の原糸です。糸取り作業をするのは、近所から通うおばさんたち。六月から八月にかけては、繭を採取する時期で、繭を煮かした湯に入れて、蚕さんがしっかりと紡いだ糸がほぐれてきます。これを二重、三重に撚りながら絹糸を紡いでいくのです。

原料になる繭は、岐阜県から仕入れていきます。繭を草野川の水を沸かした湯に入れると、蚕さんがしっかりと紡いだ糸がほぐれてきます。これを二重、三重に撚りながら絹糸を紡いでいくのです。「ええ糸を取ろうと思たら、ええ水が必要や。上草野の地域はええ水が多いから、昔から糸取りが盛んやった」と押谷さんは言います。いまは、糸取りをする家も少なくなりましたが、「美しい水が命」という押谷さんの言葉には、良い糸をつくりたいという職人気質がうかがえます。



されています。ワサビは、美しく冷たい水があるところしか成長しません。このことから、草野川の水の美しさがうなずけるのです。草野川の水を使って取られた琴の糸は、きつと豊かな音色を響かせるに違いありません。(M)

自然のやさしさを

恐ろしさを学ぶ

姉川のほとり山東田井之口



北に姉川が流れ、集落内にはその分水が流れる集落、山東田井之口は、その名のとおり水と深い結びつきを持つところ。豊かな水は、生活用水や農地のかんがい用水として大切にされてきました。でも、同じ水がときには自然の恐ろしさを見せつけるように、姿を豹変させることがあります。人々の家や田や畑だけでなく、命までも奪う災害を、たびたび引き起こしてきたのです。

井之口には、姉川沿いに幹周り六メートルもある、「神明さんの一本杉」と呼ばれる大きなスギの木が立っています。伊勢神宮から苗をもらってきて植えたと言えられるもので、堤防決壊で田畑が流出しないようにとの願い

がこめられています。

井之口では、二十数年前まで「綱打ち」と呼ばれる行事が毎年行われていました。村中の人たちが、みんなで太くて長い大綱をつくるのです。この綱は、洪水時に木造の橋の流失を防ぐため、橋と木を結ぶ綱として使われました。

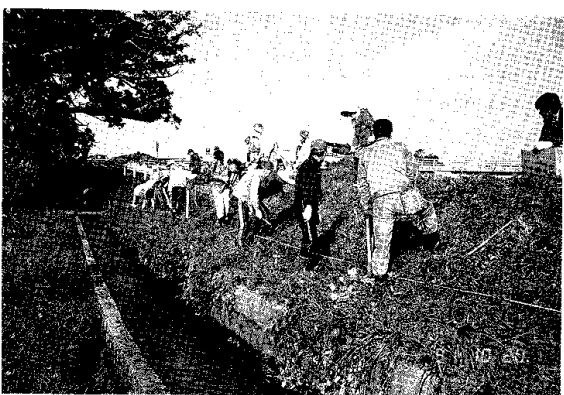
また、綱打ちの時に一緒につくられる細い綱は、堤防の木を利用した「流し」という水防策にも使われました。

「近くの木を伐り、根元を上流にして川に入れ、この綱でくくる。そうすると、水の流れが木の枝で弱められたり、流れを変えられることができる」と、自らも綱打ちをしたという三原栄一さん（六十四歳）が教えてくれました。「流し」は、先人の知恵から生み出された堤防を守る方法なのです。

いま、井之口では、河川敷を水に親しむやすらぎの場にしようと、河川敷公園を整備し、



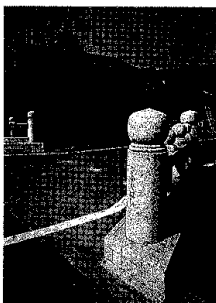
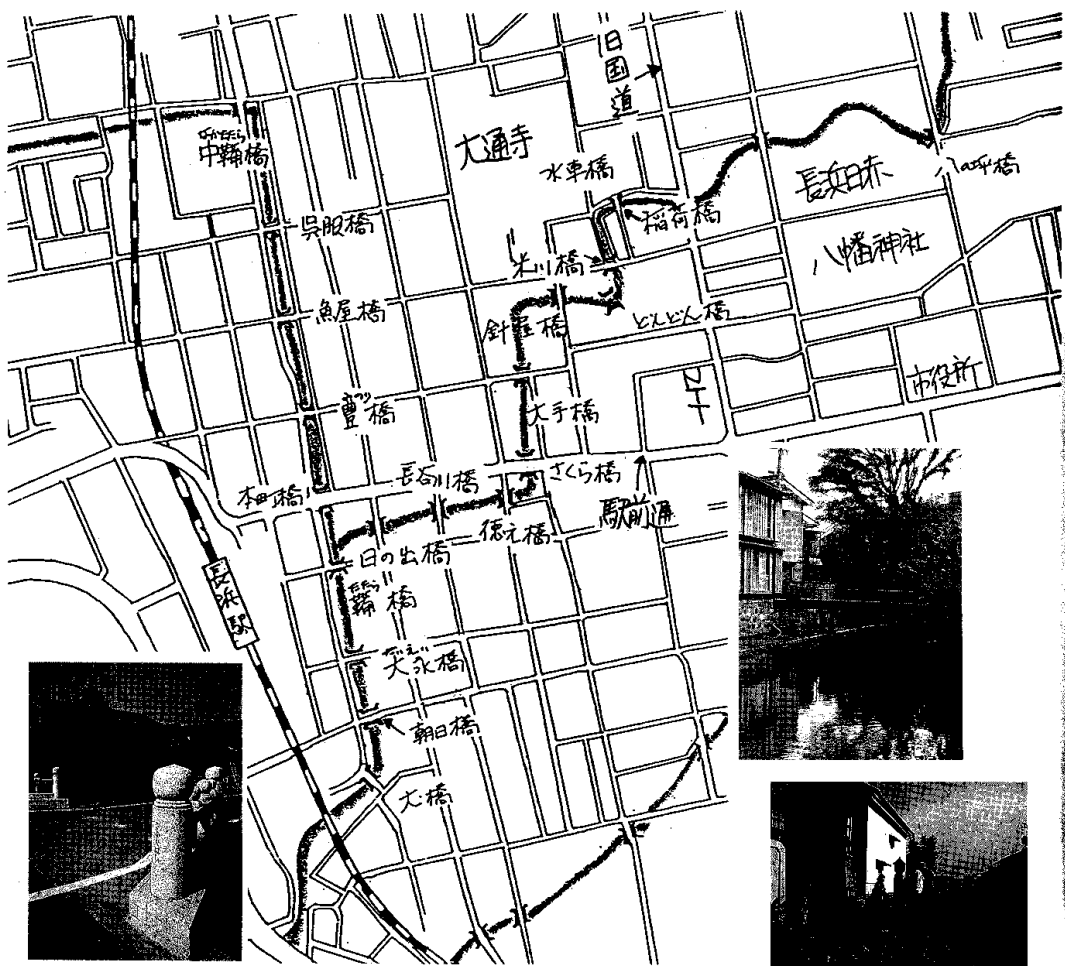
▲三原栄一さん



▲河川敷を美しくと、スイセンの球根を植える井之口の人たち

スイセンや桜（サクラノボ）の木を植えています。姉川の除草や河川の一斉清掃なども欠かさず、毎年総出で行っています。井之口の人たちにとって、生活の様式は変わっても、人と川、人と水との密接な関係が変わることはありません。「姉川をたいせつに、字内の川を美しく」というのが、井之口の人たちの共通の願いであり、目標なのです。(ま)

米川・外堀にかかる橋



橋は人生の折節の想い出を紡いでいる。そしてそれは時に、ロマンチックな郷愁をただよわせながら……。

橋畔で涙するような甘美な想い出こそないけれど、記憶の糸をたぐれば、鮮やかに、とある初夏の情景が浮かんでくる。

昭和も二十年代の末、私が四歳か五歳の頃だった。草野川に架かる太田橋（浅井町太田）の欄干から身を乗り出すようにして釣り人を眺めていた。清流の水音だけが聞こえてくるのどかな屋下がり。川面に銀鱗が踊った。

「おっさん、釣れたで！ 釣れたで！」私は思わず叫んだ。おっさんは知らぬ顔で、釣り糸を垂れたまま、橋を見上げた。麦わら帽子で影になった顔に眼だけがキラリと光った。恐ろしい眼だった。私

…姉川浜…

橋をめぐらせ、
橋畔に
立ちて。

湖北の川にかかる橋

橋

川のなかに石を置いてその上を伝ったり、丸木や板をかけて向こう岸に渡ったことが、橋のはじまりだといえます。

橋の名には、その土地や集落の名から付けられたものが最も多いようですが、構造上の名を用いたり、人名から取ったりしたものもあります。また、橋にまつわる昔話もたくさん残っています。

湖北の川にかかる数多くの橋のなかから、地元の人の話や各地の郷土資料を参考に、珍しい名前の橋、その名に伝説や逸話を残す橋などを探してみました。

⑩米川橋 江戸時代から、この辺りの川筋には米屋が多く水車で精米をしていたので川名を米川といい、地名も米川町になった。その中心地にかかる橋なので米川橋という。

⑪どんどん橋 以前は、狭い木橋があって、走るとドンドンと音がしたのでこの名がある。現在はコンクリート橋に架けかえられた。

⑫針屋橋 金屋橋（かなやばし）とも呼ぶ。江戸時代にはこの辺りに金物やが多く軒を並べ、橋のたもとに針やがあったので、こう呼んだ。

⑬さくら橋 この橋を渡って遊廓へ入る人が、行こか、戻ろか、止めようかと迷ったところから、「思案橋」とも「考え橋」とも呼ばれていた。ワクワクした心境をピンク色、さくら色にたとえて、「さくら橋」の名があると言われるが、この道路と橋は昭和10年ころにできたもので、それまでは橋はなかったはず……。

⑭徳元橋 遊廓の帰り客が、遊女に送られてサヨナラしたところから、「さよなら橋」とも呼ばれていた。

橋の南にあった玉徳料亭の主人が「徳さん」と呼ばれて有名であったことから、「徳さんの元にある橋」に因み「徳元橋」という。

⑮日の出橋 明治時代、この橋のそばに大津屋という料理屋があったことから、「大津橋」とも呼ばれていた。

①中輪橋 「輪」とは、鍛冶屋で使う火をおこす道具「ふいご」のこと。むかし外堀の内（堀の西）は鍛冶屋街で、この橋のある小字名が中輪の北限であったことからついた名。

②呉服橋 呉服屋の商店が並んでいた江戸時代の旧町名、呉服町に由来する。

③魚屋橋 魚屋の商店が並んでいた江戸時代の旧町名、魚屋町に由来する。

④豊（みのり）橋 江戸時代、この橋より西は豊国神社の境内になっていたが、太閤さんを神格化することが禁じられていたのに陰に隠して祀ってきた。豊臣氏に因んで豊神社と書いたが、「みのり神社」と呼んでいた由来により、橋の名を「みのり橋」という。

⑤輪橋 堀の水を利用して、馬具・武器・貨幣等を製造する鍛冶屋集団が並んでいた、中輪町（旧町名）の中心的な位置にかかる橋であったことからついた名。

⑥大永橋 大安寺町・箕浦町・瀬田町・横浜町・紺屋町の五カ町が合併してできた永保町に因み、縁起よく大永橋と命名された。

⑦大橋 米川の最も川幅の広い所にかかるため、この名がある。

⑧水車橋（現在は消失） 大正時代まで、本流から水を引き入れて水車で精米をしていた米川米店の水路にかかる橋を、世間で水車橋と呼んでいた。

⑨稲荷橋 稲荷神社に隣接して橋がかかっていることから、参道のように利用されていた。